

オーディオ実験室収載

スピーカーアキュライザーの導入(18)

—アナログ対デジタル(4)—

1. 始めに

前報(17)に引き続き、アナログ音源とデジタル音源の比較を行ってみます。

2. スピーカーアキュライザーSPA-7の試聴方法

スピーカーアキュライザーSPA-7の設定条件は前報(2)に述べたとおりとしますが、ケーブルの接続条件を前報(14)のとおり替えています。

試聴音源はベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲に固定し、アナログ盤、CD、STAGE+から選択します。

アナログ盤

MELODIA VIC-2056

ギドン・クレーム(ヴァイオリン)

ワルデマール・ネルソン指揮モスクワフィルハーモニー管弦楽団

RCA Victor LSC-1922

ヤッシャ・ハイフェッツ(ヴァイオリン)

シャルル・ミュンシュ指揮ボストン交響楽団

PHILIPS X-5632

ヘンリック・シェリング(ヴァイオリン)

ベルナルド・ハイティンク指揮アムステルダムコンセルトヘボウ

CD

EMI TOCE-1312

ユーディ・メニューヒン(ヴァイオリン)

オットー・クレンペラー指揮ニューフィルハーモニア管弦楽団

RCA BVCC-9325

ヤッシャ・ハイフェッツ(ヴァイオリン)

シャルル・ミュンシュ指揮ボストン交響楽団

STAGE+

ビシュコフとチェコ・フィルのベートーヴェン&シュトラウス

バティアシュヴィリを迎えて

リサ・バティアシュヴィリ(ヴァイオリン)

セミヨン・ビシュコフ指揮チェコ・フィルハーモニー管弦楽団

ホーネック&ウィーン響がドゥエニャスとベートーヴェンを演奏

(ライブ再配信)

マリア・ドゥエニャス (ヴァイオリン)
マンフレッド・ホーネック指揮ウィーン交響楽団
ホーネック&ウィーン響がドゥエニャスとベートーヴェンを演奏 (アルバム)
マリア・ドゥエニャス (ヴァイオリン)
マンフレッド・ホーネック指揮ウィーン交響楽団

3. スピーカーアキュライザーSPA-7の試聴結果

アナログ盤はLP-12、CDはEMT981、STAGE+はPC経由で再生します。

クレメルとネルソン指揮モスクワフィルハーモニー管弦楽団のアナログ盤は、1975年の録音です。若いクレメルの澁淵とした、華麗な技巧にあふれた演奏で、ネルソン指揮モスクワフィルハーモニー管弦楽団の力強く粘っこい演奏が支えています。

ハイフェッツとミュンシュ指揮ボストン交響楽団のアナログ盤は、1959年発売のもので、いかにもハイフェッツらしい華やかで自由闊達なボウイングとメリハリの効いた豪快なミュンシュ指揮ボストン交響楽団のオーケストレーションが聴きどころです。若干古い録音で緻密さに劣るところはありますが、躍動的な演奏に引き込まれます。

シェリングとハイティンク指揮アムステルダムコンセルトヘボウのアナログ盤は、1973年録音の定番の演奏です。シェリングの端正で抒情性もありオーソドックスな演奏スタイルとこれに呼応するハイティンク指揮アムステルダムコンセルトヘボウのこれまたオーソドックスな演奏がマッチしています。

これら3枚のアナログ盤は、いずれも古い録音ですが、以前に比べて、演奏の様子が生き生きと捉えられます。

メニューヒンとクレンペラー指揮ニューフィルハーモニア管弦楽団のCDは、オーソドックスでゆったり目ながら抒情性に富んだメニューヒンのボウイングと、これまたオーソドックスで折り目正しいクレンペラー指揮ニューフィルハーモニア管弦楽団の演奏がマッチしています。

ハイフェッツとミュンシュ指揮ボストン交響楽団のCDは、1955年の録音でワイドレンジとは言えませんが、自由闊達、奔放で艶のあるハイフェッツのボウイングと豪快なミュンシュ指揮ボストン交響楽団の演奏がマッチしています。

これら2枚のCDは、以前ほど録音の古さを感じさせません。

STAGE+の3件の試聴は、いずれも最新の収録で、STAGE+を楽しむ(29)でも報告していますが、その経過を再録しますと次のとおりです。

バティアシュヴィリとビシュコフ指揮チェコ・フィルハーモニー管弦楽団のアーカイブ配信は、ホールの美しい画像とともに、バティアシュヴィリのストラディヴァ

リウスエングルマンの透明感のある音のボウイングとホールの豊かな音響効果の中でのビシュコフ指揮チェコ・フィルハーモニー管弦楽団の美しい演奏が楽しめます。

ドウエニャスとホーネック指揮ウィーン交響楽団のライブ再配信は、ウィーン交響楽団は演奏会で聴いていますが、ドウエニャスとホーネックの指揮は初めてです。カデンツァはドウエニャス自身によるものと記載されています。

経過は、STAGE+を楽しむ(29)でも報告していますが、再配信での受信も安定しており、ウィーン楽友会館大ホールの美しい音響特性にも支えられ、若いドウエニャスの清新な演奏とオーソドックスなウィーン交響楽団のコンビネーションが画像付きの高音質で楽しめました。ことにドウエニャス自身によるカデンツァは、華麗で技巧を要するものですが、どこかラテン風の趣も感じさせながら、安定した演奏です。

ドウエニャスとホーネック指揮ウィーン交響楽団のアルバムは、上記のライブ配信と同様、若手ながらドウエニャスの才能が伺えます。

4. まとめ

アナログとCDの収録はずっと以前のもの、STAGE+は最新の収録ですが、すべて、これまでとは違ったレベルに達しており、これまでの仮想アース、MRF-005Tに加えてスピーカーアキュライザーやLAN iSilenceの効果も確認できました。

以上